

幼児の言語と保育

(実践報告によせて)

須 永 淑

幼児が人間社会で育つ中で言語はその中心的な役割をもつものである。したがって言語生活がひろがり充実してくることは、心情のひろがり、深まりであり、又逆に心情的な発達が言語生活をより豊かにしてゆくものである。この関係が互に作用し合う形で、子どもは成長してゆくのである。

(子どもが好き)

今回の保育実践の報告の中では、この最も基本的なことが、実に効果的に、いきいきと実行されてきたことがわかる。この保育者が徹底して子どもが好きなのである。熱心や頑張り以前に、心から保育が好きなのである。幼児を扱う仕事の者は一応子ども好きは常識であるが、この場合には全員の、それもかなり強烈な個性の子の一人一人の活発な動きを見事に受止めている。そしてそれぞれと楽しみながら関わってゆく姿がある。ありのままの心をぶっつけてくる子と遊ぶのが嬉しくてたまらず、自分もその子らの仲間に完全に入りこめる素直な資質の持主である。保育者の感動がクラス全員の結びつきを深めて、互に手をかし合いながら成長する実感を身につけさせたのではないかと思う。本物の言葉は心の動きから生まれて身につくのである。ここに本当の人間的成長があると思う。

(心から言葉へ)

はじめての相手との関わりは、関心をよせることの素直な表現ではじまる。言葉らしい音声で、又動作で、時にはいじめではと思えるような行動となって友だちと関係しようとする。この場面では、心のままに働きかけようとしている感動を大切にすること

が、次の発達を大きく支えて伸ばすと思う。形式的な言葉そのものではなく、話す心、受入れる心が育つような友達づくり仲間づくりの方向づけを行っているのである。

(話し合いの生活へ)

次に言葉を用い話し合いを充分行い、工夫して自分たちの生活をひらいてゆく姿が見られる。各自その個性をみとめ互に応援されながら次第にクラスのまとまりや、仲間としての一体感を知り自信を増してゆく。ここでは本当の意味で自分の言葉が生きて働く実感を経験する。将来の社会生活の基礎である仲間との関係の在り方が感覚として幼児期に身についてゆくのである。

(心ひらかぬ子)

言葉の出る以前の心の状態が言葉を出すもとになる。保育者と圭君、剛君のかかわりかたにくらべて、報告では失敗とあるが、心ひらかぬ子には苦勞する。そのためのこまかい配慮がのぞまれるのである。言葉以前の状態で心と心の通じ合える時をもつ工夫である。形に表さなくとも、そっと同じ場所に居る。一緒にならんですわる。同じものを見る、同じように持って動かす。一緒に食べる飲む。言葉なしでも目と目が合えばよいし、スキンシップが伴えばなお効果的である。こちらの思惑や構えを全部はずして、同調する。言葉かけはその次に自然に出てくるものである。心の通い合う一瞬が持てたらここから関係が少しずつひろがって、やがて多くの仲間にも成長してゆくのである。

(保育者も育つ)

毎日新しい経験をつみながら、伝え合い考え合って育つ子どもは、個々の生活を力いっぱい生きて、一日として同じ状態ではない。私たちも子どもの生命力、人としての多様さやすばらしさを受入れ自分の中で共鳴させられる器に自分自身を育てねばならないと思う。心を育てて言葉を豊かに、豊かな言語の表現から心の深まりへ、子どもの言語の扱いだけの枠をこえて、人の生命の真の姿を受入れながら保育者も育ってゆくものだと思う。

(本学助教授)